古今
奇談

繫野語

貳

特
へ 13
1.641
2

特
門 へ13
満 1641
巻 2

藤原文庫

古今奇談繁野話第二卷

三 紀の関守ゞ靈弓一旦白鳥と化する話

往古いづくとの世なるか。紀泉のさうひ雄れ山の関と。山口庄司次郎者なとゝいふ人の家に仕へて是を守る。多の家僕日次を接く関とはなしむ。庄司次郎は平日撓ぬ武く。平日撓ぬ外の楽しゝを要めゞ。祖上より家に義せる一張の弊弓あり。鹿島の新矢ごろなみあまた射あそぶこゝろみなり。中る射は皆羽と鏃で一筋に繋る。近村四隣れ禽獣ども獲らるゝこと幾世幾年とも知ず。家に多れたんこだたちともなろうらも咬なせり。

饗庭文庫

帝国図書館蔵書之印

庄司次郎家に古く。一族屬こゝに多くるる。今は青岡こゝぐるる大和の國人橋の村雄こゝ人の来る雪名親の家をこゝろ。書を具して紀の関に来るこゝ山にはなりて扶助とこゝ。庄司次郎新りに男子。抱へあるみ吐一歌とするに。雪名はなるとゝ温泉人の人るんで。庄司收びこゝひて

匠人求むると。居るところハ膝ぐみ出る時ハ馬をなくくして揃を。或時ハ宴和
の横目に我が代勤となして便なる事多し。雪名が女房小蝶。年まだ若く
生れ清らかなり。紡績の業にもいとど夫の衣服にそそぐ心あつく。陽気
き禄とてもなく。只糊口にかかるのみに。其居所の取りこみるいさぎ
よく。洒掃に心を用ひ蒸まじくかざず。織なせる衣のひえハ。雪名が
国に出る時嚢中に物ありてこれをと人皆さそり。庄司次郎も雪名が居所
へ訪ゆきなバ。雪名悦び心のかぎり容顔をよろこばしげども。奴僕とてもなければ
バ何をもまゐらせん。妻も心苦しく竈によりて酒肴に十余牧の薬
餅を造り。清き蔬菜に瓣葉を盛りて盤に出し。雪名諸ともに慇懃に足
をすゝむ。庄司是を今まで其志ざしの深さにあはれみ。味田舎のふるまひ。足に
茶を下して物語をも妻も傍に容位のかたち向ひてかはりてもんなでこの
なべき足ハぬがれてしてさて。物語を門立奥なる気色ハ。静閑

なるが中に媚ありてなきこれ素性はあしきぞ。雪名も此女の為にこそ親まもを
うち捨れ故にもあらで心なるぞ。足より君に来りて四方の雑話
をかたりきこゆ。まだ好が心づくもなく立よしみ深きがれば。庄司ハ
帰ること忘れて。高きをさし戯きによりて情ぞ合ふる詞の端きかけ
ど。女何とも思ひねさまなり。雪名えより耳にさそへども。ある時雪名が
留守に訪ね来る。女房独りありて絵なしくやさしく
ん。庄司ハれひきよせてあてがわれ身をかくし音せず。ある昔より是女
のかたちハ見へんが為とかくなる。みハ心ねぢや有りん。向くふやうなる足
夫の寵の下より寄りてきたるに。ぞよりてそのまゝさぐりより。やがて抱よせ
めて見んを凌ぐ。女服もなく力を極めてこそ拒ぎ。堅たく奮ひてかく
なるはひあるなしとてく女のちからまたなけれど。汗ながれて雨の
ごとく。君がいざなひに泣かなしとぞ。まつりて庄司は拳々服膺一

成して哀むべきことこそとらず。其族の惨然として人の為に傷ましむ。広国あやしみて汝せう哀むべきと問ふ。女云外ならず。花雪女の哀むべきなり。是れ一婦人の為に父に逃れ親属にうとまれ。朝夕に相離れて憂に楽しきにかへて誘ふものとぞはずれなくて汝があるが。かく人にはなれし身となりては。それをずに保ちてあらざるはむべきにあらずや。君は此家の勢家として我に勝る婢妾多くあれども眼中にあらず。朝暮擁しくして楽しみ豪華にあらるなり。今雪女は之に隠るる貧士にとつぐ。我身君の為に犯されば。是富貴をすてて貧人に奪へるなり。豈大丈夫と言べけんや。広国此語を聞て弥心頓に悟る。女を引立て我拱て云。我一時の暴悪前後を忘れし事ぞや。尊嫂これを流水に附して胸中に滞ましむる事なかれ。我此事に二念を引ば。比ずるこの擁は滴にかかるとてあらざる起る

と。若に隠て出ぬ。其後雪名が気色を窺ふに少しも世志ねさぬなり。女も前にかはらずしてかへり。我は女が我が為に面目をつみけることをうけくるつる誓ひも壊れまさへ此道。実なる其猛き人の腰ぬけともなるべし。広国浮かれ心ともあらずして。日比殺生もたのしみて擁狗は里の犬と群あそび。或は擁奴等も休息に逸居を。ぞそれのことかはらず雪名に代ひて風月の交はりともなせ花を愛し。是を観べ人なれひまた女云。むかしは婦人貞なりしねせうるぞに後世義学にとげまされども。おのく天としき身なる丈夫ありてぞの浦のころをさぞに外にはなれて。是をおさめて君の家のまへ偕縁あればば我に赤縄の術あり。君が為に媒をんべし。広国云。我年来射猟を好み同く寄せしてつまざ婚を議るの念なし。錦部の高向大ま女あり。容儀世へ高し。殊に彼は其家の旧家なれば。結ぶ

婚家となんなたびよ恥ずかしがらんぷ蝶云まらんねあり為ごろ
めべし。広目次郎怪びて行んごろふあらんてうりぬ雷名ひくと空
てなるをくうけびひる少を同ふ妻矣て其名遠ひくに近きた有。
我弟白眼痛あり〜時。紀て法式求ある醫女刀称ふ。のる白れ女
ふれ眼疾を療どそよう。名よ親〜くりて紀ようなんば吳と緒
とる〜てあるれようて合せんて仕そんどはじきあ〜。刀称ふ許
ひ紀て托〜調れべ刀称ふ鈴部郎よ紀て紙ろ〜ふ隙〜。姫を山反へ
れ結びむんや。吳相商の縁ふ〜んとて。ふまゆてひいい古家なう
我顔陀とる和なんも。今の広目ハ妻ふの数せよ猟そ〜を使者乃
ゆ〜よ人〜で我名て欲せび。刀称ふ云実よ事あり〜〜ども。今ハ食く
猟をとゆう。名よ吳ふ〜ふを悔て優よゆ。きふどさみふ広とで。
めらるようぐふを久〜く猟ろよ〜ひをうんでらぎ〜いてあり

べ我婚よ為て恥なんたのとなろうと問こ解てひいい広目妻堂と安
て音宮を通〜紀ふく婚姻を調へる。吳よようて広目一人あ〜く乃
事の沙法〜ふるうどん雷ふ夫姫衣食ふてなり。広目奴絡とふて
て小蝶の衣服乃粉よ賜ふ。ひる彩衣を製ふる事とぬまぎ。その
紀布ふ刀称ふみ乃ろ。他が着衣と換ふて服用ふ。吳ふん名は
の人ふ異なりとぞ人もふあり。名よ和泉国ふ着族登吳ふ夏人
と〜て家民あり。親ふるあ代ろ堅く数せ紙ゆ〜。名て夏人み
ふ〜ても只せる紙助ふをいて名〜。他人の数せをも紀さ〜て体〜
む。女房ハ法の母の彩よ嫁〜ふる和て出せ〜。女と具〜て紙
家よ嫁〜来り夏人よ配ふる。縁よ髪と結ひふるようのまの姫。
別て女乃ふかし〜。まとたをけて家を治めれ〜兎ふの和合。
位ろ〜ふ紙ひぞつまべ十とつて七〜名の状なるび寝ふる

まの爰ふ書かるしみうるやう。年ごろくおるうて中途み
捨なるかいぬの情をうぬる紙ぞ。我い毎なる人の志をうだ
一類のあふ遥なる所よ紀むうへば今ろ長く別をあるせんば
一品記念ふとぐ色こ並我ちひをるしてよなれもとぞ。ほと枕
にそれて立あるう。だえれ回顧て放出のうえ出るうえそ爰さ
色うれは女いるく枕上よえ別れ一張の弓をうそ毎。流まと
見ぞりしてそ寄る深の水うさとあり空寃なうべのうえ屈えそ
いたぐ大さうち消うるぐぐくうそ何をちうべよ聲ねべき。其日を
がぐいのはうまし供書たうそうべけうと傷よ立おきて別よ執て雪
に携へ広れ出せずよ別るかうそ二年の月日うう来てぞよちんか
たこの主の医日ありと別とく紀て席をうそうひけうを客伝み立
よをて早暗を供ぐまれも同じく射ひ合をうあよけう忽羽う

つおしして白きるみ変ぐ乱出る合暗ひ屈り遅出そえれば
をさして乱行。其方を同よ法けつちうひ行ぐてはも爰よちう
く紀泉の場よいる。傍なる大木の高枝よ住うしう白きるあそ
なうんとえあげうえやぐそ乱ちう。爰人がよみるいうそ原
の良弓と乱式人におやうくと爰うと疑つまぐ。其處よ
跨立やすらえ。雄の関の侍ども。あ三人来うて持うる弓を
足こめ取囲そて大よそぐあ。其うはうて法ぐよみ入まうるとる
ぢり同人爰人方のまとかうは侍ども。けうにけるぐぐるあや
ちえ分法そそ。るがさうまと先方屈へして其上のううひそ
と爰人と中よれ四て行ぐうんいうそるやう安きぐるう。かくて
広目ぐうは彼濁まるひの底をみがうく用る彼ぐんひうす我爰
矢をえせるぐ。女れひて乱むうあうんと。折言よやそ雪広矢

姐をまねき宴席を設け珍味をあつめて饗宴
を一日財をんを尽して後を〆くくりて女を粧ひと
凝して〆来り既に客殿よりて席に進ぜ上座の座をうけると
猛虎の行を倣し風に咆哮とる勢ひ眼光人を射るがごとくにふ
蝶一同にそめとさけびて座をとる
行ぐさもなりぬ雪の花周章驚とつどもひとがら沖をそ自
を恥く退ひとりくんともせざ沖かるふ袖に涙もとびなが
脱の売単皮いふをそろへて掘に遣て。髪のかざりも落ちてびん
かざりいなりぬ人と思あきれて面を合るのみなり。
庄司次郎今は何とうけまんと。我が野辺のとだこ一茎とぐく
雪名よかろう。女が出家をうるに雪名ひつぴ女房は甚だ免直園
より賣来るを親なるゆ買とりて婢とする我こまたちなる。

親乃さびしんとて妻とうけがもざるゆ。ぐうと涙まとて遠くに流
ようひ来るにたりよ。庄司次郎云ぐさもありなんと。虎の徐に彩筆
なれども百濤川喪の秀逸高向をま極彩なりしを婿にまて
潤さもしわなり。雪をて本紙を寫ひとて画真のまりさに西の
方中に浮るなりば関の者ども夏人をれかこみまて右の弓と指
糸を。庄司にて大よ驚に雪名よ我家よ祖上分
代々に尊敬してたに弓ちとそ範唐せうなれどこりつらと
いよを。家のゆ名ひうとるりてたりうらと縁せりぴらとんき
掘をるにたるこのみ〆とつこれ。近江に惜くて涙くれさあに苟
且よ用ることれ。況や久しく数ましたこりて箱をひうぶ此
教よう白狐が求衣の用として近国よ命じて。ぱよ予家射猟とよく
をる狐ひとぴ。弾る狐を求めあ〆処をよう。所の箱に開くよ

弓をうんで家人の門に置きとうし者あるやと捜ね求むることを急なり其方をうんで盗織しまつりくどく懐しきふ説をうんでうずとゝいへども今回和尚さるこもあまたび世の中怪るゝ所に推べきにあらず其男ハこで免をき本国に人を遣て其身許をも受たしと。云白ハ皆こ無ゝ紙掃て散じ乃る。其和尚庄司が愛に小蝶来りて云ふ我母とゝ共に孤にして死の長者がみふ春屋命を免るゝ事度なるべし其報うこく彼が家に掃搭紙とり狐胡乃山の関守が殺生を禁ずる制止せんとの念ありて達せず我も念を候て先世が寶弓をゝ隠し我身のかまうしてまく友人に郎け大和なる雪石をさそひ出し山に来る。保が魂を迷り免て漸く殺生禁ずるの事かなへば白孤を捕せらるゝてのうゝてさよ。ゝなぐゝ昊人の言伝ふて孤妻何の寶となすべき。服部下の皮を縫ある也てゝ白狐ありうるとも。猶ほ殺くして服部に堪ず肌不平なり。年経て白狐となりうしい毛落皮拾て妻とゝもに免観るし此より公に告く孤白妻の用なれるを語りまゝ。去ても霊なるゝ和彼石弓を他家にとゝまゝず。自ら起て山口の家に帰るゝ祈るゝ掛画虎威真に逼りて我が多年の亟変を破る。昊皆和尚宝物みて我が力に及ざる所なりと。其和尚し妻の和ぐゝ所石人もたゞゝ一詞なれば。えま一孤の和ふりて三人捕くの石機を弱しめる。其拾本に庄司が卯れのまが殺生より事れたりゝ。其拾に孤を長く庫裏にたゝね。其拾にあゝずして云盗の孤をゝるすに公を潜るなりとぞうゝ人やとりて再び殺生に拾ゞ雪石友人も迷惑をれるゝ。女房を嘉ふんのやまざりゝとべ。同しゝひに庄司有興ひくゝ。

どりな
引き渡したりし弓のつるのまゝ忘へば若や生ればいとくゞなし
雪名もくちりひつでるそ
なかれてつるやいろさんとろかる紀乃川上の白鳥の関

友人
朝かよひ跡らを継て紀の川の流のたゆるひまなる我瀬かと

二人ハ幸ミをとうしるひそ大かいづこにかつりぬ彼姥の山乃関を白鳥乃関とも呼るなるハ此謂によるとぞ

④中津川入道山伏塚を築ある話

足利の世漸一統ならんとれ貞治応安の比勢別多度の口に楠湊の余といふ人文武雙全の士へあまて遠近従遊の人多し。其中に三年ばかり来り学ぶ人字多須都と呼者。其人必様く人の誤を改めしてを言るが。一日人なにかなして問て云。世の人おいふなるハ実や。南朝の功臣武名を四海に遠し。摂河泉の史館し従三位中将を贈れし判官楠公湊川に戦死す跡を継し往をのがして。今変名をなす家則先生なりと云。小生も年比なる然然そてえきまぼふ常倫の器にあらず。只大事の時節に至り合れといへども。かのまどハ宮方の客軍。矢田十郎義登とろしまのなるが。宮流刑の名身とのがれ生国なれバ此地に来て。逆にあるハ出ふをあり。爾来土も本も足利の風に偃て南朝に裏へ。其舊好ある者朝夕當とくひ来るハたんべきならんし。先生ふも逆帆に出さば其徒なれふあらじ。帥の律師則祐今輪の中津川に鎗をかまへ。赤松附属の地を看る。僕と其二の舊遊なれば舊能を忘ればなへし。奥は備後の三郎高徳存生して。時々文通ありとばまて只今方の衰敗をなげく。九列の菊池勢微なれども義を屈

せん。新田義治の方其初代を祭ぐも摯こ拾存命なるゆへ今ふて頂
弩の人あらば。其後ふ流て馬集ふ者ハ代同じうせん賢愚いうど
同ふ樵侍奚に迷惑の体ふて世上の人我を指と沙法をるゆ疾ふう
我耳ふて乃ふ[illegible]。出石の白なる来場ふべきふとあらざ。ふ[illegible]
なに雑説ふて奚方を始め世の人軍情代知れなるゆ蜀の諸葛孔
度も祁山ふ出ふいふ必ど勝れ術あるにあらに魏の勢日日ふ強大なれ
だ。ふ方面ふて取鎮めるのとそ。ふ[illegible]代者ふて危きに迫き
ゆ勢を逃て国家ハ[illegible]代者ふ計来ゆる相国の身となりていの
なりり心若しかん。いるゆ英雄ふて世ふ行れ未あれば敵と計
に見ゆ。我軍器足らぬあれば。足とて軍ふ勝べきふ為十分ふ
とふやうハなり。其上時変あり兵変ありて千変れ万ふ出るとゆ。
老世代ふ者ふ昔土師乃何某ふ始て猫の姓を賜りしふハ菖蒲王

の外戚なりゆ代。なありて其姓を継むひて八代好右の大将言ふう夜
をふち樟原ふいるうてふ身微力なれども宿軍れ大指ふ[illegible]振
さ〜久〜き土地の姓を得て大敵をふ[illegible]。軍機を秘ふ〜て。
変化鬼神のごとくふ[illegible]ゆ。足皆其時ふ流て疾疾の中ふう智
計を練出し。一族士卒ハ結忠ふう指ぎ方せ。智に及ばざるふ[illegible]
をせて命ふ従うせ。人ふ敵をるも日本国を〜ふて[illegible]ふ
一命。ゆ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]君に捧げ。若ハ操たゆ[illegible]ふ力を
ふ師ふ労し。恢復の時代ふて。足利厚謀及の徒ふ[illegible]海ふ
走らし免。叡山ふう還幸なし[illegible]ゆ[illegible]名を[illegible]ふ
い時運のとゞむふるゆなう。ふ来ふとむけ賞四討怕条なし。
新田厚英雄なうといへども。家
流ふ家運傾くの小条ふうふ[illegible]ふ対せ。

天命の改まる所。明眼よりこれを勝べきの敵よあらじ。そもそも軍
利を以て極りなきものなれば、されば心よりして精氣をたゝし。時
をえざるの人多く孤死なり。己れ嬉しき多病にして病に死
せんよりいまだ事を決せんと。二十二歳にして下山孤死し
ぬ。強会なれども。今はそれ孤死の国をくづさねと所べ。
士ものいわん人を求ぶべきこと。生れたるなれば黄石公
が眞しこ隠を隨て張良を取たるごとくなれば。其踏ひよりの
教を張良なる。様成初と大命の改まる所を知て来すれ
なり。絶い命の華をそそ孤仙て君と報ぜ。公の靈あらべ然者
の恵を多ふべし。但し盟を楠公と呼び。右代樟乃宮俗に榜
と者ふ武楠の字ふ混じるとも。はまさを別嘉見れ仙
ありて時を家ものなるべし。是人情なれば悪しきなり

ぞ。ものともせず成ぬそ。ものに別の根基とする大和紀の路一流
して基本巣穴なり。今略起乃徒の事を成べきこと。あらず。拙足
下も手法諸事ちるこなれば。ぞひ立てるる乃成ざるうちに
て手ものと。枕ものべき角なる木を二つ引出し。是をそれ行べ為
不身に示を張弓なりと。掛ける長刀を下して宇田川と接
け。足下角に就を張して石突を仙て直下み突通し試に見。
次に錦を下なり。角中に金をとる所ありて力にまり石突下とし
角木貫めて徹まり。一個を乃て突下をたゝ。ぞひ度ハ陳ゆるだて
角木張拡んあり。次に同て云ぞ。ぞ占めがこまどる。右雷云ぞ其ハ要き
通りなるハ円者ものて仙相れ仙べ。志力法き所ハ在るべ。後の要乃
ざるハ中外なく絶木なり。孫武子が突とるもの代ごとしよこの
是なり。おべ必ぞ其兵を撰す。是すこで陳を陳んで一時に突とし

なり。今此世の如きハ實者となりおすべきの時にあらず。或ハ卦下窮
なりたる堅くして通らず。突なる方質たるが如く變卦ある状なれ
ぬ事成就をべからず。人情なく初勇氣あるも一たび利を失ひ
ては勢折け始終を保がたし。兵書に始ハ處女の如く後ハ脱兎
の如しと云り。脱兎ハ處女の既に破身したる状口悪に言る其
法乃ち掾謗なるを孫子取て譬とせりと。新田家雜謗に語りまひ
しは張弩の勢も放したる末にてハ魯縞の薄を通さぬと同意
なり。足下の如く突ひ寄りにるゆかしき勢を失ひたるて愍用
ぬ時には寄勢なれども是のなり。然じよのるも出ひさず愚老が
諫に従ひたまへと。理状せめて紫を穿の詞に。得赤面してまた胆
せず。彼が面げはざるハ是非もなし。我窓事をかうらて
になりかさしと彼長刀の鞘をはらしなぜつらんとする時。右来

早く後の一間に入りて戸を引立たり。一重の障ハ拙くは突通さん
と突長刀の鍔本より屈状したまへば鈍刀なり。かゝる所へ門生数
人ハ集り来たりたれど何事なく貌を正しくし。君子は其劔を執りては
接く事できことなりしと出さんとする時。右兵衛出来て再びいふ。
次郎作んよ。清平れ世事に用ひまだ未だハ術に害ひ小人ハ必ず
凶なり。用ひどして安き所ハ鉛刀に論なし。動ハ止るに志さざるべし。是愚
老が足下を送るの餞今より永く絶をべしとて次郎甚恥入
り面を低て崩れ逃るが如く其家を去ながら衣袴が動揺に
為せの人柄なれば世の人に疑なしと我心迷ひてかく言人にして足
情人眼中に西施を出をとる事なるべし。宇田次郎をぞにに
外せしう人ハ早く出ひ来んとまより其身出伏の姿におおいて渡
延の住吉沈ハ古め知音なれバとて彼に行て其心動揺をさぐり

あり何とぞ則陣入るに一面せんと中津川に立こえたるに塁高くかく
げ。高門大鋪厳に設け。露えに水法堅まる舟をならべたる櫓乃
鉛鉄炮挿て火炎に備へ。門内の白砂に至まるに奥ふかく。対面あること
も近活にア入がたく。看門の者に向ひ。某は国然とア術験道や
先年窓教に系せし時。御主人に朝夕伏侍せん来本山に於る
しが。上京の路次懐旧捨がたく推参仕り。此趣お次でまへるべしと容
看門ものさてやうて入て主をる者に入道誰なるやと一礼に法た入まで
出て見あれるに。多隔てぬまとも見忘れぬ先臣義登なり。
様ぞや慕なりしと詞を親くし茶法喫せし次酒会を設し。
従事助へるにつきず。住吉坊に宿をとればみてそ系らんと其日は何
事なく逗留して帰りぬ。日を隔て再び行しかも疎意なく
相待して酒会席を同じく喫し。昔にかはらぬ気色を見て。義登

膝をすゝめてアハ。南朝乃股肱義に宮の眼近職をうけ給し
頃能出たる人なり。時うつり代かはり献備をたへぬとぞ。入道も嘆
息して。宮の御謀反ハ叡慮より出て。却て賊家にゆづら
せ玉ふ例のまのあたりを君命なりしぞよ。見たりしながら造
化の自然かるれ所なし。義登云。ひさしの嘆をともあさん
しとおのまゝハ今に忘まじ。貴君にはかねて我も人にもつき
まざる所なれども。隠居して世にあらざれ身ハ日ふ月に其情
うすく。夏ふでも周公を見玉はざりしかも又にふひし。義登云
僕ハ行晦も回復の念やむべ。おそれ眷白のよしミと云まで加祖
あらば日ならずして従参ん。貴君には聴玉はん。今勢州に在
満れ云法と友ゑもろハ。正しく楠判官と見へてあり。彼が二男正勝
衰ふれども猶子鍬破を守る。奥路に四ゑる徒あり。四国に義宗

ひそかに思ふ。孤一孤千津川内山変せば。誰とも一さび義を論ぜん。
なるべ朝せばして居るあ多町人ともの中より入道面々か
ら。義登左ぐらく待ひよ。此事我館まで詰どべきことにあらず。必
ど妄用うるべし。義登面温て云。貴殿身の逸楽と安んじて舊と
捨ふて。人の禽獸と異なる所を知るやと。早悪言と及べ。人乃史
ふ思びど既よたかれなん様さんとせ。自ら為し脳とさ
をりて云。拙老ら変にあるハ。遁隠と似て変ハ只利欲れ乃小輩
をなすなり。是様なる山伏来りて我と多んとしてさ人家人多
類を去てをなるに。ある論詰と時を極して互両人怪なれと似
あり。只今你を送る使者そ住右防の方へ行て詰を交へんと。
義登を促して舟を立しめ。其身ハ一個の僕ぬをも具せず。
脇乃門より出るに向つて打まとりる。乃もがくこと甚し。義登

你と我と舊識なりとへども。志れ紐隔をろして君子匹夫の
遠あり。匹夫ハ君子れ乃我紐ゆ。君子ハ匹夫をとろ易
易し。義登乃如りて我いるあ乃ハ是匹夫なり。人乃天下の
善をなせば天下を利と。是君子なり。人乃害なせば天下
に害あり。是匹夫なり。近来天意錯乱に倦て法世と入り。蒼生
よみうりくろ乃ひをなり。四方の兵を執をあなれと。你一人
有余を立て。自ら憤を快くせんと欲して乱を唱ふる。遠べきて
あらねども。只紀ま乃風かつて激しの勢とぬべ上下を震動し
人民業に就て成ぬど。天兵一たび隙んで所甲も為ざるいる
ま。你ハ一旦れ義勢を振て。後末の名欲と死とろとも矣を含
まん。你ら乃ふいざるましたらん衆百の人命を落し変と失ハ
しや。其衆皆你ふ咎を。老夫日日世の安寧を上歳我ひろう乃

まび匠まなることを発まず。拳既ニ八神のあり。隔壁一層人耳多し。再び心志をつくしかりし。今捉老を妻ニのカとらひてさらへども痩せざるゞ〳〵。世の人もみちうん抱とぬくうつまて已よ融寺の南門を彷徨て。位右防も絶ちくなれど。ぬく牧もしげなれ入ると日道して彷なゞ。彼防も我を妻乃人の中小安だしとゝえ来須慮れ義登よ〳〵へ乃を抱よもべ〳〵と。発鐵の尾と右涙色の名人遠き所まて調をも掛どせる〳〵く切つけ〳〵。へ乃名ゐ乃の乃のきて抜あるもよせろ剛つ二三度せゞ〳〵へ乃鳥兵を迷くゝとびてゝてゝ切つけ切伽し。傷ま〳〵ながら世れ乃ふ害衆のぞく自〳〵你ゞ兵を抜ゆ〳〵刀れ血押拭ふ所よ白ふなる神祠の教ゞげよ。一人の農ま鍬を杖よたきて所乃ろゞ去ろ来ゝて笠乃紙乃まび中津川よ新糸の下紐なり。

の単身ゆて出ゆをゝて乃ありせず。乃人ゞ乃れよ所仕せり。とゝて其体ゆ乃ゆをんゐゞ〳〵へ乃如てゆまれざるかのまゞ装知兵ゆまてれゞ紙紙を世上よりゝさん乃次よふ怒るゞゝれ〳〵よする事急なるて乃んで此男制止う。我ハ倍居よあゝゞ鹿色ゝゆなゝゝて乃ゝへ乃にきてゝる〳〵て乃ゝ成おきすゝゝも油汚せゞ。其時ハ男懐中の嚢ゝ安堵の所書と出てゝふあゝてゝとゝる所墨付彷まなゝく何ゝの郡を充紙ゝる某ゝ発郡新九清門魅乃充ゝこと形ゝ南方裏へなまゝゞも奮居多し。中津川入乃今京紙の干城をなすも其本ゐいまゞ知ゞゝゞよゝて某ゝて先侯の家ゝ竊候とるゝ。今事ゝ名ゐゞゆゝ姓名を技寡ゝとゝへ赤松力と称ゝ敬て。矢田十郎ふ説ゝる利害の紙を結まゞ発郡ゝ甚こ

と成公論と稱し。是下の本分ぬかれば業完と是をそでむ
だをかぶれたるごとくにて。あるしさん。此事極位と同体して
中陳内なるうぬ。入る矢因が古戦場なる所の者と
今ぶて。其地の場因と埋め土を築きて戦場なる時の人
屍を山伏塚とよびなるとん。其後霊蛇あり。くい塚み
出没をなる人多し。又霊火ありて色を出せと。怪し
とつゞく害をなさず。偶ゝ是をなる人は必其志を成
就をとゝ云伝へくり

古今奇談繁野話第二巻終